日本統合医療学会 会報
IMJニュース
No.23
2016年8月25日発行

編集･発行　一般社団法人日本統合医療学会広報委員会 委員長　川嶋みどり　URL：http://imj.or.jp/
〒981-0932　宮城県仙台市青葉区木町5-29　菅原ビル2-A
一般社団法人日本統合医療学会事務局　E-mail：imj@imj.or.jp　TEL：022-341-2410

特　集

サマーセミナー2016

佐藤　美弥子
（一社）日本統合医療学会理事
（社）日本ヨーガ療法学会理事

７月16，17の両日，福島県郡山市磐梯熱海温泉にて【災害と統合医療―ネクスト・クライシスへの備え，みんなが生きるために】というテーマで第４回サマーセミナーが開催されました。

はじめに仁田新一理事長より，各分野の専門家が集うセミナーなので，力を合わせてよりよいものを作っていかれるよう，互いに敬意を持って意見，発表の交換をして頂きたいという開会のご挨拶をいただきました。

また，この度の熊本地震についても，地元で何が求められそれに対して何ができるのか災害時の統合医療について考えていきたいというお話があり，日本統合医療学会から熊本への義捐金が吉田紀子先生を通して手渡されました。

支部活動についても，これから立ち上がる支部の紹介や，すでに立ち上がっている九州ブロックの各支部をはじめ，全国的に増えつつあるというご報告もいただきました。

第１部では５年を経過した東日本大震災について東北支部，福島，岩手の会員から，また，熊本の被害状況について熊本支部吉竹カンパニー様からの報告があり，第２部では『大規模災害に対する統合医療』と題して大阪大学の林紀行先生，『被災地を支援する際の統合医療の課題』と題し小野直哉先生（未来工学研究所）から話題の提供を頂き，熱のこもった質疑応答が交わされました。

第３部はワールド・カフェ。この討論のスタイルは第１回目の箱根から続いているもので，組み替えをしながら進められる小グループでのディスカッションは個人一人ひとりの意見が尊重され，互いの活動やビジョンなど本音で話し合える参加型のセミナーになっているのが魅力です。

第４部は小早川義貴先生（災害医療センターDMAT事務局）から“Disaster Medicine”について多面的な内容をユーモアを交えながらお話いただきました。

２日目は朝ヨガに始まり，東日本大震災から５年「災害と統合医療」というテーマで，福島県支部長の丹羽真一先生にお骨折り頂き，初めての試みとして福島支部との合同セッションが行われました。

仁田理事長と伊藤壽記先生が座長を勤められた総括討論では，災害は忘れた頃にやってくるというが，最近は加速していて忘れる前にやってきている。南海トラフのことも視野に入れ，有事の時に自助・互助・公助の点からも多職種連携で持続性のある支援ができるよう，これからも多くの課題を乗り越えながら，システム作りをしていきたいということで締めくくられました。

特集 サマーセミナー 2016

進化するサマーセミナーの魅力
ーオプショナルな個人的な体験もまじえて

｜川嶋　みどり｜
（一社）日本統合医療学会広報委員長

「継続は力」の言葉通り，回を重ねる度にその内容も深化したサマーセミナーは今年で４回目を迎えました。帰路の電車の時間を気にしながら，折りたたむようなまとめのセッションに心を残すのも慣例となりましたが，前夜の時間外の盛り上がりのための少々の睡眠不足と，からだの奥底に残る湯疲れを超えた達成感は私だけのものではなく，仙台までの三々五々の車中談でも想像することができました。

東日本大震災から５年以上が過ぎ，熊本地震から３か月というこの時期の，「災害と統合医療」という主テーマに関してのユニークな問題提起，加えて福島県支部との共催によるセッションでは，具体的で多彩な経験から多くのことを学ぶことができました。答えは１つではなく，災害規模やその特性。そして時期区分も深く影響することを再確認できました。ひとえにプログラムの進化の結果であると評価できます。

サマーセミナーは，本学会を構成する多領域の職種の会員が，「統合医療」という共通テーマを挟んで学び，相互理解を深めるためにそれぞれの思いや疑問を持って参加し討論する場と機会を提供するものです。セミナー（ゼミナール，演習）というのは，小グループによる学習形態であって，参加者の自由な発言と主体性が成功の鍵になると思われます。

その意味からも，昨年から恒例となったワールドカフェは，その本領を発揮する場でもあるのです。飲み物や軽いつまみが準備され，リラックスした雰囲気の中でテーマに集中した対話をするというスタイルで行います。５～６人で構成するチーム内では，誰もが自分の意見を率直に述べることができ，否定されることなく尊重される場を保障されます。相手の意見に耳を澄まし共通点や相違点に気づきながら自分の考え方をまとめるのです。ただ，グループでの一体感の生まれた頃にはメンバー交代となるので，少々物足りない感じもしますし，今のところ全体でどのような話題が出され，どのような共通点や相違点が語られたのかを共有する時間が生み出せていません。でも，初対面の人と同じテーブルを囲んでのやりとりは，夜の懇親会のムードを高める効果もあるようです。

実は，個人的には，このセミナーの参加直前まで気が重かった理由がありました。それは，月単位で続く膝の痛みが一向によくならなかったためでした。段差の昇降が不自由，歩く速度は滅法遅くなっていたのです。ところが，会場でカイロや鍼灸の方にその悩みを話したら，直接膝に触れて頂きツボの所在や歩き方のコツなどを教えて頂く機会がありました。そして，夜には，臨床アロマセラピーの指導者で大活躍中の相原由花さんが施術を約束してくださったのでした。何と，白衣に身を包んでお仕事道具を一式抱えての来室でした。浴後の弛緩しきった私のからだの表面を由花さんの両手がアロマオイルの香りとともに流れるように滑ります。時に包み込むように解きほぐす感触を自分なりに言語化して表現しようと思っているうちに，うつらうつらとするひとときもあり……この10年来，「て・あーて」を推奨している立場からも，統合医療における「手」の効用をもっともっと広める必要を感じたのでした。そして，この施術の効果を何としても体感してほしいのは，薬を処方し検査を指示する医師たちではないかと思いました。由花さん本当に有り難うございました。

翌朝の目覚めのよさと，ヨーガの朝練に向かう足どりの軽さを感じ，朝食の美味しかったこと！ 宿泊をともにするセミナーのもう１つの魅力でした。華の湯のみなさんの行き届いたサービスの数々，さりげないけど学習成果の一因にも通じるものがありました。来年は，もっともっと多くの参加者を期待したいと思います。

特集 サマーセミナー 2016

楽しみながら充実した学び

｜大瀧　真美｜
桑園メンタルクリニック看護師
（社）日本ヨーガ療法学会　認定ヨーガ療法士

本セミナーについては，昨年の参加者から「とても良かった！」と聞いていましたので，ほとんど何も考えずに申し込みをしました。しかし，直前になってテーマが「災害時に統合医療は何ができるか」と知り，災害や災害時の支援の体験のない私が「果たして参加して大丈夫なのだろうか？」「場違いでは？」と多少の不安を持ちながらの参加でした。

セミナーの内容は震災後の現状と支援の報告と質疑応答，ワールドカフェによる話し合いなどでした。ワールドカフェではリラックスした雰囲気の中，グループメンバーと話しをし「災害時の統合医療」について考えることができました。

セミナーで最も心に残っているのは，吉田紀子先生が，「いざ被災した時に，心身の回復が早い人は，日ごろ周囲とつながりを持っている」とおっしゃっていたことです。人の心と体の健康には「繋がり」が重要であること，またいざとなった時には普段の行いが投影されるのだ，と思いました。災害があってから考えるのではなく，日ごろから心と体の免疫が高まるような習慣と生活を心がけること，自分も大切に，周囲の人も大切に過ごすこと，これは災害だけではなく，「病気」に置き換え

ても同じことが言えるのではないでしょうか。

個人の健康とコミュニティの健康は相関関係にあるのだとあらためて意識をしました。コミュニティでも日ごろから近隣付き合いや結びつきを高めておくことが，コミュニティの免疫力が高まり，これは個人の免疫力とも相応するものではないかと思います。

災害や災害支援の体験を持たない自分ですが，家庭や職場，地域など周囲の人を大切に，より健康的な社会をつくるよう日々の小さな積み重ねをしていく事が重要なのだ，と心から思うようになりました。

また，こんなにも「楽しみながら充実した勉強ができた」というのは，とても貴重な体験でした。地元でも，このように多職種の方々と楽しみながら統合医療の学習の場づくりができるよう工夫していきたいと思います。

セミナーでご一緒させていただいた皆様，セミナーを企画・運営して下さったスタッフの皆様および仁田理事長に深く感謝いたします。

寄稿

ホリスティック医学の本質から統合医療の核を洞察する

｜大塚　晃志郎｜
ホリスティック医学研究所所長

1987年に日本ホリスティック医学協会が創立され，数々の議論を重ねた末に定められた，日本のホリスティック医学の定義は，「1．ホリスティックな（全的な）健康観に立脚する　2．自然治癒力を癒しの原点に置く　3．患者が自ら癒し，治療者は援助する　4．さまざまな治療法を選択・統合し，もっとも適切な治療を行う　5．病の深い意味に気づき，自己実現を目指す」となっている。米国や英国のホリスティック医学協会の定義では，体・心・精神といった全体を観るという表現はあっても，「自然治癒力」そのものを「治る力の原点」として明言し，定義したのは，日本だけである。そのことは世界に誇れることであろう。なぜならば，西洋医学の父といわれている古代ギリシャのヒポクラテス（460BC～370BC）が，外界の自然と同様に，体内には「自然性」（フュシス：Physis）のはたらきがあり，それこそが治る力のはたらきなのだ，と明言し，病が治る自然の力（vis medicatrix nature）を，病が回復する過程で不可欠な治癒の根本原理としていたからである。統合医療とは，ホリスティック医学の方法論として，定義4．の内容を掘り下げていった当然の帰結といえる。

ホリスティック医学とは，ひとことでいえば，「いのちまるごと」を洞察する医学である。あまりにも病気中心に機械論的に生命体を見て，病気を敵として攻撃し，征服しようとする医学よりも，身体だけでなく，心も，精神性までも視野に入れて，生命体の全体性やつながりまで視座に入れて，洞察しようとする医の哲学であり，プリンシプルなのである。ホリスティック（Holistic）という言葉は，ギリシャ語のホロス（holos），すなわち「全体性」という言葉から来ており，health，heal という言葉も，そこから生まれている。

ここで，西洋医学の源流ともいえるヒポクラテスを，よく調べてみると，その発想と思想が，かなり現代西洋医学の機械論的な発想とは根本的に異なっており，実は，その医の発想の本質が，むしろ，今の西洋医学よりも，アジアの伝統医学や東洋医学に似ていることに驚かされる。医療の本質は，実は，本来は東西同根ともいえるものなのかもしれない。そして，まさに，前述のホリスティック医学の定義は，実は，ヒポクラテスの医学の発想にそのままあてはまる。すなわち，西洋医学の父であるヒポクラテスの医学の本質は，まさにホリスティック医学であり，その発想は，まさに，東西を問わず，医の原点なのであろう。

ところが，西洋医学の歴史で，19世紀になって，ウィルヒョー（1821～1902）が細胞病理学の祖となり，「病理学の法王」といわれたほどの彼は，絶大な権力を持つ政治家として，全ヨーロッパの医学界を支配してしまう。そして，病気そのものの観察と研究に極度に集中するあまり，病人自身のことは二の次に忘れ去られ，まるで病人が病気の標本のごとき扱いを受けるようなことが，現実に多発する。病気の医学は，病人を忘れた。この傾向は，今でも，現代医学に少なからず残っているように思われる。

その同時代にあらわれたのが，英国のナイチンゲール（1820～1910）である。彼女は，「われわれは（病気研究の）医学をやるのではなく，病人のケアをするのだ」と明言して，ここに病人を看護する専門職が誕生した。実は，その患者を取り巻く環境への洞察と観察，配慮は，「環境医学の父」といわれたヒポクラテスの発想そのもののであり，病気を治癒への「回復過程」と見なし，ナイチンゲールが患者自らの自然治癒力の決定的な重大性を深く理解していたことは，まさに，医聖ヒポクラテスの洞察そのものであった。すなわち，西洋医学の本質であったヒポクラテスの発想と精神は，いつのまにか病人を無視して，病気しか診ない西洋医学の本流において忘れ去られ，その医の原点としての本質は，実は医師ではなく，ナイチンゲールと彼女が育てた看護師たちによって，「病気よりも病人を看て，ケアする医療」が継承されていったといってもよい。

ゆえに，日本が高齢化社会になり，病院での医療以上に，在宅医療が重要になってきた今日，「看護を統合医療の核」に位置づけようとの試みは，歴史から西洋医学本来の医の本質に立ち返れば，まさに正論といえよう。

公募のお知らせ　倫理委員会

倫理委員会委員長　小野直哉

当倫理委員会では，現在，学術団体を取り巻く社会的倫理環境の変化から，当学会に於ける倫理関連規定の見直しと補足・改定作業を順次行っています。

この度，当倫理委員会では，「日本統合医療学会 倫理宣言」，「日本統合医療学会 倫理規約」，「日本統合医療学会における利益相反に関する指針」の見直しを行い，補足・改定等を伴う改正案の作成作業の初期段階を終了させました。

これに伴い，倫理委員会では当学会会員に対し，「日本統合医療学会 倫理宣言」（案），「日本統合医療学会 倫理規約」（案），「日本統合医療学会における利益相反に関する指針」（案）に関するパブリックコメントを下記要領で公募することにしました。

公募要領

1．公募期間：2016年9月1日(木)～2016年9月30日(金)まで
2．コメント条件：現役の当学会会員であること
3．コメント方法：当学会事務局(e-mail：imj@imj.or.jp)宛てに，電子メールにて
4．コメント対象：以下3案
「日本統合医療学会 倫理宣言」（案）
「日本統合医療学会 倫理規約」（案）
「日本統合医療学会における利益相反に関する指針」（案）

＊2016年9月1日(木)～2016年9月30日(金)まで，日本統合医療学会ホームページ上にて公開。

インフォメーション

第2回日本統合医療学会九州ブロック学術大会

テーマ　大規模災害を含む国民のニーズの変化に応える日本型ヘルスケアへのパラダイムシフト－人と地域を元気にする持続的全人的包括ケアの実現－
大会長　吉田　紀子(社会福祉法人恩賜財団済生会鹿児島支部長)

日　時　2016年9月10日(土)　13：00～18：00
11日(日)　9：00～12：30

会　場　城山観光ホテルエメラルドホール
(鹿児島県鹿児島市新照院町41－1)

プログラム

特別講演Ⅰ　「わが国における統合医療の推進について」
堀　裕行(厚生労働省統合医療企画調整室長)

特別講演Ⅱ　「今後の地域包括ケアのあり方と全人的医療」
三浦公嗣(前厚生労働省老人保健局長)

教育講演Ⅰ　「大規模災害と統合医療」
小野　直哉(㈶未来工学研究所21世紀社会システム研究センター主任研究員)

教育講演Ⅱ　「統合医療における看護の役割」
川嶋みどり(日本赤十字看護大学名誉教授)

シンポジウム　「大規模災害含む国民的ニーズの変化に応える日本型ヘルスケアシステムへのパラダイムシフト」
赤木純児，伊藤壽記，坂本昭文，鈴木清志，仁田新一，本坊輝雄，吉田紀子
(助言者)三浦公嗣，堀裕行，保岡興治

問い合わせ先
日本統合医療学会九州ブロック学術講演会事務局
Fax.：099-802-1587
E-mail：camkagoshima@gmail.com(運営事務局)
ホームページ：https://sites.google.com/site/jcamkg/

新刊予告　2016年11月刊行予定

ケアのなかの癒し　原著第７版

統合医療・ケア実践のためのグローバルスタンダード

ルス･リンドキスト
マライア･スナイダー
メアリー･フラン･トレーシー 編
尾﨑フサ子･伊藤壽記 監訳

B5判　600ページ
予 価　6,000円＋税
発 行　看護の科学社

統合医療･ケアのグローバルスタンダード･テキスト最新版！
- 統合医療に関する最新の知見でアップデート
- 世界各地で用いられている療法を網羅
- 米国国立補完統合衛生センターの最新情報と最新分類を紹介/他

【主な目次】
Part 1　実践のための基礎
Part 2　マインド・ボディ・スピリット・セラピー
Part 3　整体とボディベースの治療
Part 4　天然素材のカテゴリー
Part 5　エネルギー療法
Part 6　教育・実践・研究

決定　ルス･リンドキスト先生来日　刊行記念講演会開催
詳細は次号でお知らせします

事務局だより

【会議開催報告】
■2016年1月8日　平成28年学会役員と賛助会員の新年交流会(アルカディア市ヶ谷)
■2016年2月21日　日本統合医療学会モデル委員会
■2016年3月5日　平成27年度　臨時理事会
■2016年4月11日　企画委員会(八重洲ルノアール)
■2016年5月9日　企画委員会(八重洲ルノアール)
■2016年6月3日　平成28年度日本統合医療学会総会(東京大学医学図書館333室)
■2016年6月13日　企画委員会(八重洲ルノアール)
■2016年7月25日　企画委員会(八重洲ルノアール)

【学会事業報告】
■2016年1月26日　平成28年　統合医療展参加(東京ビッグサイト)
■2016年2月7日　平成27年度ウインターセミナー(東京大学医学部教育研究棟)
■2016年7月2日，3日　平成28年第1回認定資格セミナー(東京大学医学図書館333室)
■2016年7月16日，17日　第4回日本統合医療学会サマーセミナーin郡山(福島県磐梯熱海ホテル華の湯)
■2016年7月24日　群馬県支部設立総会(群馬大学)

(文責：事務局長　河野　明正)

編集後記

●蝉の音が盛夏を謳歌していますが，天皇のお言葉，体操男子団体の金メダル，イチローの三千本などに耳目を集める一方，酷暑の中，未だに余震が続く熊本のみなさまのご苦労を思います。被爆七十一年目の平和宣言から，核廃絶に向かっての「英知」を，福島第一原発後の被災地にも向けることの大切さを示唆されました。涼風とともに九州ブロックの学術集会，山陰支部の創設など，統合医療学会の躍動が期待される秋。ご自愛を祈ります。(川嶋みどり)